

■明智地域を捉えるポイント

01 市街地のイメージ

明智地域の特徴は、周囲を比較的低らかな丘陵に囲まれた中に意識的集中する市街地が広がっている点にある。こうした立地的な特性から、市街地のイメージは中心部へと向かうような構造になっている。

02 境界

まちの周囲を丘陵に取り囲まれているため、その際のラインが境界のイメージとなる。その外側からは、千畳敷公園や明智山荘からの良好な視点場と眺望が確保されるとともに、市街地との関係性が生まれる。

03 アプローチ

外部から中心部へ至るアプローチは、基本的に河川の動線に沿ってあり、丘陵の間を縫うような形で内部へと繋がっている。中心部へ至るルートが限られているため、過度な領域感が生まれる。

04 地域産業エリアとしての周縁部

工場やまとまった農地など、市街地からは直接認識されない地区が市街地及び明智地域の生産を支えている。中心部にも農地は残るが、周辺部の要素との関係性や連携の可能性が考えられる。



明智地域現況分析図

■空き家問題について

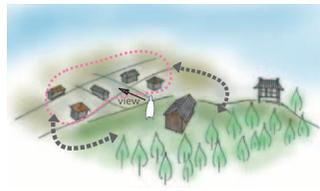


産業の喪失や観光の頭打ち状態に端を発する少子高齢化によって、現在明智地域にも空き家問題が顕在化している。これら空き家・空き店舗が増加傾向にあることで、まち全体に散らばった雰囲気や活気の低下を思わせる一因ともなっている。

南北街道沿いエリアには多くの空き家が点在しており、なかには老朽化から取り壊されているものもみられる。多くは歯科医院や金物店、理容店などの店舗が古めいているが、現在ではまったく使われていない。その他の店舗との雰囲気の違いが顕著に表れている通りとなっている。

また、東側に続く丘陵地上に明智山荘が位置しているが、街道沿いの空き家との関係性が読み取れることも特徴的である。

■心の拠り所—明智山荘



明智山荘は明智の市街地中心部から東に上った、小高い丘の上にある。元々は料理屋で、看板に『民芸食事処』（四季折々の高原の野趣産物…山里の味を満喫）とあるように、季節の食材を使った料理で人々に慕われていた。現在は周辺の空間も含めまったく使われておらず、建物も空き家状態が長く続き老朽化している。

しかしながら、まちの中心部からほど近いところに立地しているということ、丘上からの眺望が確保できること、そして紅葉の絨毯をはじめとした四季折々の自然を楽しむことなど、人々の愛着や誇りの集中する重要な拠点であったと考えられる。また、丘沿いの道の先には秋葉神社があり、旧三宅家住宅やロマン館等のまち中心部に戻る一連の道筋としても、明智地域におけるポイントであるといえる。



明智地域空き家分布（南北街道エリア）

■現況分析から見出せること

01 領域内外との関係性

明智山荘周辺空間は、各時代において人々の愛着や誇りが向けられる核としての視点がまず考えられる。その上で、山荘付近を境界とした周辺の歩道との関係性や、市街地との視点場との関係性など、領域内外の関係性が考えられる。

02 意識の集中する市街地におけるにぎわい

周囲を丘陵に囲まれた明智地域は、特に市街地に意識が集中しやすく、そのなかでも空き家の存在は活気の低下を思わせる要因になっている。空き家に着目することで、日々のにぎわいの見える化が考えられないだろうか。

■提案趣旨

岐阜県恵那市明智地域は、近代には養蚕・製糸業などの産業が発達していたことや交通の要所としての宿場町といった、比較的丘陵地に囲まれた立地ではあるが非常に文化的なまちとしての位置づけを独自に築き、栄えてきた。しかしながら、度重なる時代変化に伴い、産業は窯業へと形を変え、そして日本正村という観光産業へと移り変わりながら、行くべき道を模索し続けているなかで、心の拠り所を失った人々とはことなく明智地域に暮らす実感を持ってなくなってきた。

本提案では、なかでも人々の意識の様々な活動と、住民の心の拠り所ともいえる明智山荘を中心とした空き家に着目し、空き家問題の解決と活動の「見える化」をリンクさせることで、現代におけるにぎわいの再構築を目指し、新たな自治意識を持てるようにすることを目的とする。



■岐阜県恵那市明智町の概要

岐阜県恵那市明智町は、岐阜県のほぼ東南端に位置し、その西部は愛知県との県境である。恵那駅を始点とする明知鉄道終着駅でもある明智駅が、まちの窓口となっている。近年は少子高齢化が著しく、人口減少が進んでいる。

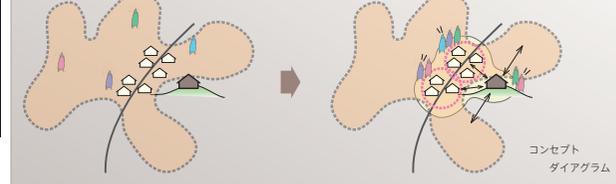
産業は養蚕・製糸業や窯業を経て、昭和59年に住民主導で始まった「日本正村」があり、大正村全体を観光や歴史、文化のストックとして位置づけている。

しかしながら、一方で少子高齢化の影響で空き家・空き店舗が増加傾向にあることで、まち全体の寂れた雰囲気や活気の低下の要因にもなっている。また、住民はそれぞれが個々に活動を繰り返しているものの、多くの自然や歴史、文化の資源をうまく活用できていない現状にある。



提案のコンセプト

以上のような特徴をもつ明智だからこそ、まちの中に日常的にまちづくり活動に参加することができたり、その成果を感じられるような仕掛けが存在すれば、双方向的に様々な活動が起き、その活動は人々の目に留まり、まちを動かす大きなきっかけとなると考えられる。さらにその仕掛けを空き家問題の解決とリンクさせることでより政策としての実効性が高まると考える。



明智山荘周辺の空間デザイン

周辺市街地との関係性を考えた上で、視点場の整備や周辺との物理的繋がりをつくることにより日常的利用を促進し、明智山荘周辺は住時の愛着や心の拠り所としての意識を持たせるための舞台を整備する。

空き家を利用したにぎわい見える化プロジェクト

お隣さんの認識がまち全体に広がる明智ならではの人の意識の高さを空き家問題とリンクさせ、一人ひとりのつぶやきから様々な活動に広がる可能性を持つプロジェクトを行い、普段から市街地におけるにぎわいをつくりだす。

明智地域

—「見える化」プロジェクト

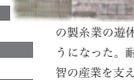
明智地域が潜在的に持っている人々の意識や糧となる場所の「見える化」をソファ面、ハード面とも組み合わせることで、住民にとっての新たな自治意識を醸成させる。つまり、生きがいを持って暮らすためのひとつの方策として提案することを考える。

暮らしの変遷と人々の意識

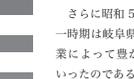
01 産業と暮らし



明智町（以下明智）では明治～大正にかけて製糸業が最も盛んだった。しかし次第に先進製糸業地に圧迫され、明治末年、大正9年の不況期を経過することに衰退していった。決定的な打撃を与えたのは昭和6年の大恐慌で、これによってほとんどの企業が消滅した。



戦後は町外の資本が進出し、かつての製糸業の遊休施設を利用して、近代的な製陶業を始めるようになった。耐火レンガ、磚子が盛んで、製材業とともに明智の産業を支えた。



さらに昭和50年代になると明智には多くの企業が定着し、一時は岐阜県内でも上位の財政力を持っていた。まちは産業によって豊かになり、そして人々の生活も豊かになっていったのである。

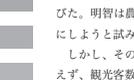
02 観光と暮らし



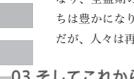
しかし、技術革新時代を迎え、主産業が不振となり、明智は急速に過疎化を迎えていった。時代の流れとともに人々は産業という大きな心の拠り所を失った。



そんな中、当時の明智が時代に取られ残されていくという危機感から昭和58年9月25日に観光協会は大正村建設を決議した。その効果は絶大で、平成8年には観光客数が45万人にまで伸びた。明智は農業でも工業でもなく、観光産業でまちを豊かにしようと試みたのだ。



しかし、そのストックとしての質は決して高いものとはいえず、観光客数も年々落ち込み、平成20年には15万人となり、全盛期の半数以下まで減った。『大正村』によってまちは豊かになり、住民の生活も豊かになると確信していたのだが、人々は再び心の拠り所を失ってしまった。



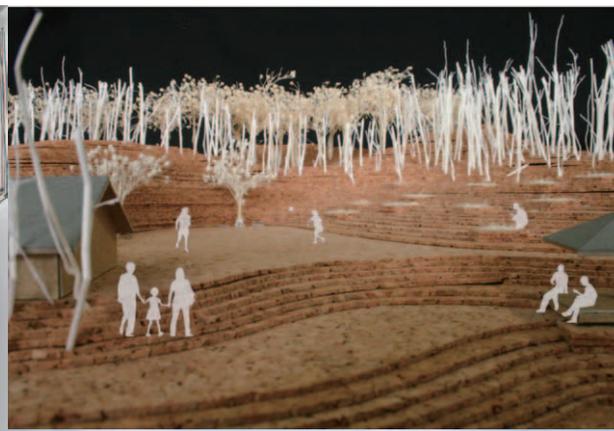
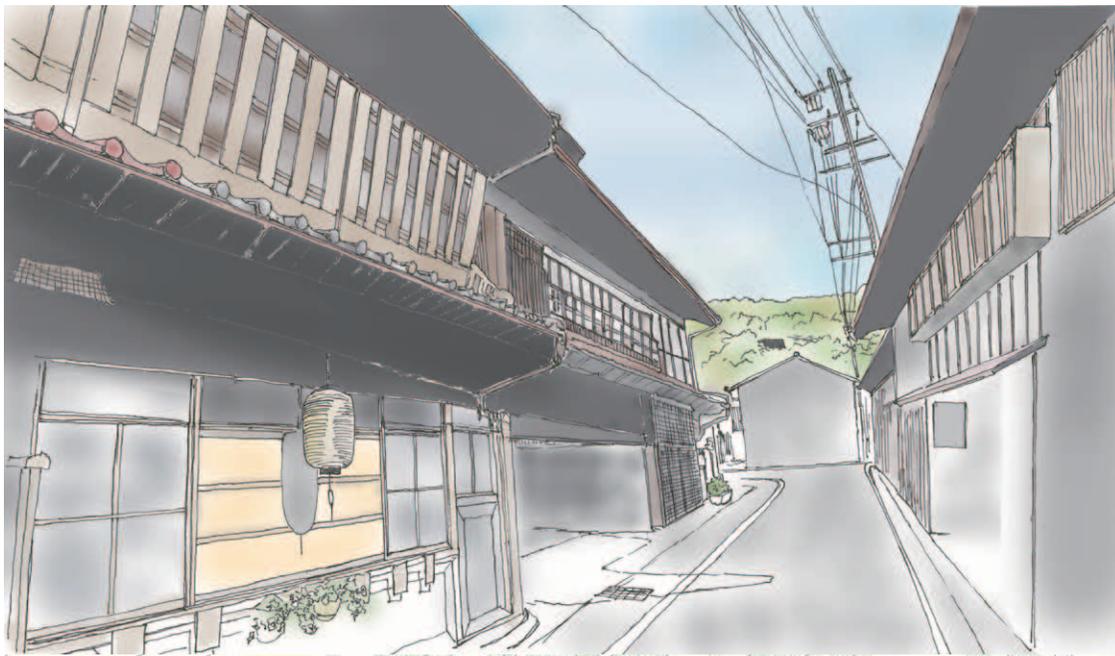
『大正村』としての観光産業は次第に衰退し、さらに過疎化の象徴ともいえる空き家の増加によって、現在まちは当時のにぎわいはない。一時のイベント時に多くの人があつまるだけである。しかし、現在でも大正村関連の団体をはじめ、様々な団体ともにも組み合わせることで、住民にとっての新たな自治意識を醸成させる。



つまり、生きがいを持って暮らすためのひとつの方策として提案することを考える。



体系または個人が関与して活動しており、また大正村として一度成果を挙げているので、明智はまちの活性化やまちづくりに対する住民の意識は非常に高いといえる。



平面計画図

■明智山荘周辺整備

相互に視線のやり取りが生まれ、日常と非日常の混在の場である。

01 視点場

高い立地条件から東西エントランスに二つの視点場を設ける。東側は明智山荘からまちへ、西側は四阿からまちへ繋がる場所となる。東側は市街地の眺めが、西側は手前に畑がありその奥に市街地の眺めを望む事ができ、明智らしい眺めであり、まちの南側を望める稀有な場所である。

02 にぎわい見える化プロジェクトの舞台

明智山荘・正面の平地が舞台となる。屋内の舞台は明智山荘・屋外の舞台は正面と北東の平地である。平地の裏には、舞台を演出する際立つ自然の壁がある。日常は制限のない空間として利用できる。斜面の上の回廊は東側・西側から周りこめ、イベントの視点場・散歩道となる。

03 家庭菜園

まちの周縁部、中に散在する菜園を東側の緩やかな斜面に造り出す。日常ではお互いの作業する姿、広場で利用する人の姿が見え、イベント時には格好の視点場となる。イベントに訪れた人は農の風景も体感する事になる。平地を生み出す為の石積みは古くからの地域に伝わるセルフビルドの産物である。

空き家再生 — にぎわい「見える化」project

phase①

なんの変哲も無い
単なる空き家を・・・



phase②

3つの用途で1つの UNIT とす
ることで、活動の拠点とします。



①まちづくり企画課の発足！！

まちづくり企画課

市の若手職員を中心に、「まちづくり企画課」を発足させる。彼らはまちづくりカフェ一件あたり、必ず一人常駐し、カフェの運営、住民のまちづくり企画のマネジメントを行う。これにより、市の職員が住民の日常の声を直接聞くことができるようになる。

②まちづくりカフェの日常。

まちづくりカフェには「つぶやき黒板」があり、住民の「あんなことしたい」、「こんなことしたい」という日々のつぶやきを気軽に黒板に書くことができる。

③つぶやき黒板の効果

黒板に書かれた、住民のつぶやきはカフェにくる様々な人々の目にとまり、またあらたなつぶやきを生む。そのつぶやきに対して企画賛同者が集まれば、それはまちづくり活動としてカフェに付随する「空き地」、「空き家」で実現する。

開催決定!!!

④つぶやきがまちづくり活動に!

企画にかかる資金はカフェの売り上げから支援し、住民の負担にならないようにする。空き地や空き家は日常的に住民が企画の準備しており、企画当日以外でも住民の活動がまちなかで見られる。

⑤そしてまた、新たな活動へ。

地元新聞が成果を取材！

企画が成功すると地元メディアに取り上げられ、さらに多くの人に企画の様子が紹介されます。さらに、その後の住民投票で多くの票があつめた企画は、まちの一大イベントとして明智山荘公園で開催されます。また、カフェの管理人はプロジェクトことに交代することし、様々な市の職員が経験をつとこととします。